

---

# 作者がテーマを選べないショートショート集

はまさん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

作者がテーマを選べないショートショート集

### 【Nコード】

N3312Y

### 【作者名】

はまさん

### 【あらすじ】

ものの名前が書かれたカードをシャッフル後、ランダムに複数枚引いて、お題を決定。またある時には、他人様からのお題をリクエスト。

自分でテーマを決められないまま、短編小説を書くというチャレンジです。果たして作者は生き残ることができるのか!?

作品を読む前に、まずお題を見て自分ならどんな物語を作るだろうか? と考えてから読まれると面白いかもしれませんよ。

## 第一回 兵士とミルク

世界情勢は緊迫し、明日にでも大戦が起ころうという、この時。同盟を組んだふたつの軍事国家が秘密の会議を開いていた。

「この度は我らが編成した、補給部隊の新たな運用法を紹介しようと思うのです。この部隊を運用することで我らの勝利は揺るがないものとなりますようぞ」

「ほほう、頼もしい。詳細を聞かせてもらいますかな」

「その名も牛乳部隊！」

「えっ」

「戦地にあっても毎日の牛乳を欠かさず飲むことによって、兵は戦意昂揚！ 健康増進！ 必ずや我が軍を勝利へと導いてくれるものと信じております」

「いやいやいや、無理があるでしょ」

「左様、解決すべき問題はいくつかあります。その中でも最大のもの、いかに戦場で牛を育てるかにあります。これには補給とは別に、畜産農家から成る部隊を編成せねばなりません」

「いや、お前ら十二考えてんだ」

「引いては金銭的な支援をお願いしたいのですが……」

「もつやだこの同盟国」

## 第二回 冠とロープ

正しき王は遂に、王権の篡奪者を誅殺した。

「おめでとございます、王よ！」

王が追放された時もずっと仕えてきた忠臣は、篡奪者の死体から王の証である冠をはぎ取る。

「さあこの冠こそ真の王である証。王権の象徴。さあどうぞ」「うむ」

王は血で汚れた冠を受け取った。すると宙へ放り投げ、手にした剣で真つ二つに断ち割ってしまった。忠臣は驚く。

「なにをなさるのです！ あんなに取り戻そうとしていた冠ではないですか」

「違う。我にもう王冠は必要ないのだ。お前はこれを憶えているか」といって王は懐から、汚れて黒ずんだ縄で作られた輪を取り出した。

「それは忘れもしませんとも」

王権を篡奪され一時、王は縄をかけられたまま辺境へと追放された。だが処刑される直前、忠臣の手によって脱走する。一命は取り留めたものの絶望深い王に、忠臣は縄を解くと今度は、輪を編んで語った。

今はこのような縄で作った冠しか、あなたへ差し出せません。ですが、いつの日にか真の王冠を取り戻そうではないですか、と。

「この忠義の証こそが、今の我を王たらしめる証。いくら黄金で作られ宝石で飾られようと、篡奪者の血で汚れた冠なぞ、王権の証にはならぬよ」

そういつて正しき王は縄の冠を被って、玉座へついた。後に彼は自らを「黒縄王」と名乗ることとなる。歴史に黒縄王の治世は、忠義深い臣下に多く恵まれ、長い平和が続いたと伝えられている。

### 第三回 交換と成長

「ここが才能を売る店ってトコか」

入ってきたのは、派手な服に、ゴテゴテとアクセサリをつけた。いかにも自分は金持ちであると主張しているかのような男であった。深くローブを被った店主の老婆は、しゃがれ声で対応する。

「へい、らっしやい。何か才能が御入り用で？」

「応よ、俺にアーティストの才能を売ってくれ」

「そのための対価は……御存知ですか？」

「ああ。売られた才能によって得られる、一生分の収入を寄越せ、つてのがこの店のルールなんだろ？」

男は店主の前にドンと札束を放り投げた。

「俺様は親が既に金持ちだからな。金には不自由しねえんだ。だが金があっても、自己顕示欲ってヤツ？ 他人から尊敬されてエって欲はどうにもならねえ。金で俺自身がどうにかならねえ限りな……」

4

「ええ、全くその通りでございませう」

「だが、この店なら俺様は誰しもから尊敬される天才になれる！ さあ売ってくれ。俺様がアーティストとして活躍できるよう、才能を！」

「はいはい、お待ちくださいませ。今から計算しましゅからね」

老婆はソロバンを取り出すと、しばらく何か計算しだした。そして……

「はい、御客様へアーティストの才能をお売りした場合の生涯収入が出ましたじゃ」

「おう幾らだ？ 何億だつて払ってやるぞ」

「残念ながら、御客様へ才能を売ることはできませんじゃ」

驚いた男は老婆の胸ぐらを掴んで叫んだ。

「どういうことだよ！ 金なら幾らでも払うってんだろ」

「いえね。御客様がアーティストの才能を持った場合、一生に稼ぐ

金はゼロ円。御客様は才能があつたとしても、自分では何も作らない。作ろうともしない。そういうお方だつたということですよ」

顔を真っ赤にして怒り狂う男を前にして老婆は笑つた。

「一円でも価値があるのなら話は別ですよ。儲けにもならない、商品が無駄にするだけでは、お売りできません。これぞ、まさしく宝の持ち腐れというやつですか」

## 第四回 牛と消滅

遂に宇宙人と地球人との対談が始まった。

「ほほう、するとあなたは地球でいうところのスポーツ選手のようなものということになるわけですね」

「私の場合に限っては、またスポーツ選手とも違ってくるかもしれませんが。むしろ、日本文化圏におけるブシドーとかタオといった概念に近いでしょう」

「その違いとは？」

「ほとんどの者はレジャー、エンタテインメントとして行うものなのですが。私は手段が目的になったといえますか。《極める》の目指すようになったわけです」

「極めると、どうなるんでしょうか？」

「そうですね。まず一対一で行うところを、極めることで、より多くを相手にすることができるようになります。また小さな部分だけを目標にしていたのが、より全身を対象とすることができるようになりました」

「なるほど、その極めた結果というのが……」

「そうですね！ 私のアルティメット・キワメ・キャトルミューティレーションは地球全土の牛に対して、しかも内臓だけではなく個体そのものを、消すにまで至ったのです！」

「だからって地球上の牛を絶滅させること、ないじゃないですかー！」

対談相手である地球人代表の畜産農家は怒り狂って怒鳴りつける。さきほどまで自慢気に語っていた宇宙人は素に戻り、その場へ土下座した。

「ホンマ自分、調子に乗り過ぎて、すんませんでしたー！」

以上がキャトルミューティレーション被害の会、第一回会合の顛末である。

## 第五回 蝶と鋼

「お願いします、マスエトロ！ 私を弟子にしてください」

「すまんが、他を当たってくれんか」

「職人は数多くいれど、マスエトロほどの美しさと儂さを表現できた者は他にはいない。私はその奥義を知りたいのです」

「ふん、こんなモノがそんなに良いものかね」

「こんなモノだなんて……鋼蝶「ステイル・パピヨン」は癒しの効果があるとして需要は高まる一方だというのに。どんな優れたAIにも再現不可能。ただ熟練した職人だけが製作を可能にする。発達した科学技術で不可能のなくなった現代でも。人類が誇るべき、素晴らしい芸術品ではありませんか」

「芸術品なあ。ワシはそんな大した物のつもりで、コイツを作っておらんのだ」

「えっ、ではマスエトロはなぜステイル・パピヨンを作っているのですか」

「若い。蝶、という生き物を御存知か」

「残念ながら……」

「ワシはその昔、子供の頃。生きて羽ばたく蝶を、一度だけ見たことがある。その時の感動を再現したくて、今でもこんな紛い物を作っておるのじゃ」

「だったら私もその蝶を見ればマスエトロの奥義を知ることができるといふことですね!？」

「ああ、だが蝶はとくに絶滅してしまった。アーカイブにも残っていないかもしれん。もはや蝶を知る、ワシこそが人類最後の……」

老いたマスエトロは顔を伏せると、滂沱の涙を流した。



## 第六回 結婚と油

もう一時間は対向車もない山中の道を、僕らはずっと走っていた。僕は助手席に、そして運転しているのは、フィアンセの彼女。結婚の報告をするため、僕らは彼女の生まれた村へと向かっていたのだ。

と彼女がカーステレオのスイッチを切ってしまう。途端、車内は静寂になる。

「どうしたんだい？」

「分かつているのよ、あなたの企み。そろそろ本音を聞かせてもらっても良いんじゃない？ 私に近付いたのは、私があ村の出だから。でしよう？」

「勘違いしてもらいたくないんだが……」

「ええ、分かつている。あなたは私を本当に愛してくれているし、私もあなたを愛している。それは真実。でも村へ着く前に、確認しておきたいの。民俗学者としての、あなたの願いをね。私もあなたに協力するつもりだから」

「やれやれ、気付いていたとはね。そうだ、最初、君へ近付いたのは、君があ村の出身だったからだ。そう。その昔、処刑を免れたキリストが日本へ流れ着き、住んでいたというね。

正直に告白しよう。僕の狙いは君の村に伝わる、真実の歴史。そして秘儀の数々だ。その中にはバチカンですら失った古代の秘儀。神が聖者エノクへ施した聖油の祝福に関する伝承まで残っている。そうじゃないか。凄いよ。その秘儀を知れば、人の身が、神として聖者を仕立て上げることすら出来るわけだ」

「呆れた。どうやったのやら。そこまで調べがついているのね」

「だが、その知恵は外部に決して明かされることはない。ただし、一族と血を共にする……つまり結婚相手にだけは例外的に伝授される」と

「その通り、更に補足すると。古代ギリシャのデルフォイ神殿に伝わる技法こそが、その秘儀の基となっているそうよ」

「驚いた……。エノクの祝福だけでも奥義中の奥義だというのに。フリーメーソンどころか、世界中のどんな魔術結社でも持っていない古代の知恵を、君の村は今に伝えているというのかい？ 世界史がひっくり返るぞ」

「ちなみにソレがどんな儀式かってゆーとオ。聖別した油を全身に塗った屈強かつオイリーな男たちがあなたにレスリング勝負を挑んでくるから勝って頂戴。それが結婚の試練になるから。彼らの名前は東方ガチムチ三賢人。あつ、あと古代オリンピック方式ということで、レスリングの試合中は一糸たりとも衣服の類は着ちゃいけないから。もちろんパンツも駄目。フルチンで油塗れの筋肉男たちと組んずほぐれつ、お願いね」

「え」

「いやー、ここまで知った上で私と結婚してくれる気になるなんて。やっぱ都会には奇特な人がいるものよねー。らっきー」

「すまない。用事を思い出したんだが」

「さー、そろそろ村が見えてきたわよー。事前に連絡してあるから早速、儀式開始ね！ れつつごー」

「たーすーけーてー」

## 第七回 笑いとブタ

争いなどない平和な平和な、草食どうぶつの国へオオカミさんが引越してきました。どうぶつの皆は逆らうことすらできず、オオカミさんに食べられていきます。ですがブタさんだけはオオカミさんの家来となつて、大人しく命令を聞くことにしました。

そんな日がいくらか続き、どうぶつの仲間たちも少なくなった頃。皆はブタさんを囲んで怒りました。

「ブタさん、君はなぜオオカミなんてひどい奴の言うことを聞いたりするんだい？ あいつのせいで、どうぶつの仲間たちはすっかり減ってしまったじゃないか」

するとブタさんは仲間たちを嘲りました。

「ははは、ばかじゃないのかい。ぼくはオオカミの家来になつているから、食べられずに済んでいるんだ。くやしかったら、お前らもオオカミの家来になれば良いじゃないか」

笑うブタさんに呆れて、どうぶつたちは立ち去ってしまいます。

それからオオカミさんはどうぶつの国の仲間たちを食べ続け、とうとうブタさん以外に誰もいなくなつてしまいました。ですが自分だけは無事しているとブタさんは、笑顔のままです。

「やあやあオオカミさん、良くもたくさん食べたもんですね！」

「ああそうだな。やっと前菜が終わった。我慢したよ。やっぱりメインは、充分に太らせてからでないとな」

## 第八回 清浄と贈与

ここは善なる精霊を信仰する教団。若き行者は次代の大僧正となるため、最後の試練に挑もうとしていた。現大僧正は行者へ告げる。「お前は眠りの中で、善なる精霊と邂逅することができるだろう。ただし良いか。精霊の意思を全て受け入れ、決して拒絶するでないぞ」

大僧正の呪文で行者は眠りにつくと、そこにはまばゆいばかりの光を放つ、善なる精霊がいた。

善なる精霊はまず、何もない空間から食べ物を次々と出した。世界中、古今東西の贅を尽くした料理が所狭しと並ぶ。何事かと驚いた行者だったが、「精霊の意思を拒絶してはならない」という大僧正の言葉を思い出し、ありがたく食べることにした。

次に精霊は黄金に宝石と、きらめくばかりの宝物を山ほど出した。行者はこれも精霊の意思ならばと、ありがたく貰うことにした。

次に精霊は美しく蠱惑的な女を出した。行者は女たちとの愛に溺れ、試練のことを忘れていた。

いつしか行者はこの世の絶対なる暴君となっていた。気紛れで自在に天を曇らせ、ワガママのまま自由に大陸を割り、徒「いたずら」に海を汚した。

ここまで来て行者は、善なる精霊の変化に気付く。輝きはすっかり失われ、その身はボロボロになっていた。行者は気付く。精霊は自らを顧みず、身を削って、行者へ尽くしてくれていたのだと。

そこで夢から醒めた。

大僧正はニヤニヤと笑いながら、起き出した行者の顔をのぞき込む。

「どつじやった。善なる精霊とはいかなる存在かわかったか？」

「あれは……この世すべての恵みを育み、人にとって余るほど富を、尽きず与える。善なる精霊とは、豊穰なる大地そのものだったのですね」

「その通り。アレは生命を育むというだけの存在であるがゆえに、まさしく純粹に善を施そうとする。ただ、それだけの存在じゃ。本来なら崇拜されるべきモノですらない」

行者は肩を落とす。

「こつして目が醒めたということは、私は大僧正の言葉に逆らい、精霊の意思を拒絶してしまったのですね。試練は失敗ですか」

「なぜ精霊の施しを拒否してしまった？」

「自らを省みず傷だらけになった精霊を、気の毒に思ってしまったのです。……ですが完全なる善とは、本来そうあるべきだったのに。私は堪えられなくなつた。」

それだけではありません。余りに膨大な施しを行う精霊へ、自分はこのままで構わないのか。精霊に二心があるのではないか。自分も何かすべきではないかと恐くなってしまったのです。……相手は完全なる善。二心など、あろうはずがないのに」

行者の報告を聞いた大僧正は、自らの袈裟を脱ぎ、行者へと与えて「お前が次の大僧正だ」と笑つた。

行者は戸惑いを隠せない。

「なぜ精霊のような善性を持ってない不完全な自分が大僧正の身分を継げましょうか。そもそも、この試練は精霊の施しを拒絶すれば失格だつたのではないですか？」

「いいや、それは違うぞ。有限たる人間に、精霊の純粹さは堪えられぬ。自らの愚かさを、相手に投影してしまうからな。定命たる人間に、精霊の施しは余る。ゆえに人は精霊のように、尽きない善を行えない。人は精霊のようにはなれんよ。」

だが人は、矮小であるがゆえに、おもいやりを持つ。他人の二心を恐れるゆえに、感謝し返礼しようとする。それは精霊には不可能

な、人だけの善性じゃ。

善なる精霊を信仰するとはいえ、教団を成すのは人の群れだからな。身の程を知った、お人好しの臆病者になれば任せられる。精霊様を利用しようとするバカどもから、精霊様をお守りする役目をな

それに……」

最後に先代の大僧正はガハハと豪快に笑って、新たな大僧正の肩を強く叩いた。

「夢とはいえ、膨大な欲望を満たしたんじゃ。そんな人間はもう、おかしな欲を出したりせんじゃろ」

## 第九回 墮落と竜

狭苦しい長屋に、大の大人が三人。ちいさな卓袱台を囲んでいた。ひとりには長屋の住人である中年男。もうふたりは派手な背広に、眼光鋭い面構えのヤクザ者である。

中年男はふたりの間へ茶を置くと、どっかと座り、自分も茶をすすった。

「で、組長の具合はそんなに悪いのかい？」

「ええ。頭に銃弾を受けて峠は越えたものの、まだ意識の戻っていない重症です。くそっ、割土井組の奴らめ。しらばっつてくれてやがるが、アイツらがやったつてのは分かってるんだ！」

「それで今日は兄イに頼みがあつて来たんです」

ヤクザのひとりが深々と土下座した。

「組長の意識が戻らない間、残念ながら組を収めるだけの貫目がいねえのです。このままでは組がバラバラになっちまう。引いてはその昔、昇リドス竜とまで呼ばれた兄イの力をお借りしたいのです。

何だったら、一声号令をかけてくれれば、兵隊の百人も集まりやませ」

そこで玄関の引き戸がガラリと音を立てて開いた。

「お父ちゃん、ただいまー……あれっ、お客さま？」

「おう、サチコおかえりよ。父ちゃん、相手しねえといけねえから、ちよっと遊んできな」

はいいと元気に返事をしてランドセルを玄関に放り投げると、サチコは再び外へ出て行ってしまう。

「オヤジさんに恩を返したいのは山々なんだけどよ。見ての通り娘がいてな。昔みてえな無茶ができなくなっちまった」

その昔、昇リドス竜と呼ばれた男はシャツをおもむろに脱ぐと、異名の元となった背中の入れ墨をふたりに見せた。

「見てみるよ。オイラも家族持ったらすっかり太って、背中 of 昇り

龍まで横に広がっちゃった。もう一度とお天道様にや昇れやしねえ  
よ  
「



## 第十回 性欲と雨季

それは山口美保が村の新任教師として赴任してから数ヶ月目のことだった。

村は山間の僻地ゆえに戸数こそ少ないものの、人口における子供の割合は不思議なくらいに多い。そのため活気があり、過疎独特のさみしさはなかった。

学校も全学年合同で授業を行うとはいえ、むしろ生徒たちとの深い関わり合いが持てる。山口美保はこの村での生活におおむね満足だった。

が、ある日、不意に疑問を抱く。

出席名簿を眺めていた時のことだ。気付いてしまう。村の子供たちの誕生日が、異常に偏っているのだ。誰も彼も、3月から4月の間に生まれている。それも全学年においてだ。

一般に妊娠期間というのは十月十日とか260日だとかいわれている。ということは逆算すると、6月から7月の間に村で何かが起こっているということになる。いったい、この村で何が起きているのだろうか。数年後、その答えを山口美保はその身で知ることとなる。

つまりは、何ということはない。複雑な形状をした周囲の山々から影響を受け、この村は梅雨時の雨量が凄かったのだ。麓の繁華街へ行くには自動車でも数時間かかる。村に娯楽はない。となると家に引き籠もった人間がすることなんて、ナニしかないわけで。

というわけで梅雨時に種付けされた子供たちが、春先に生まれるという……。

「まあ分かってしまえば、どうという話でもないんだけどね」

美保は家の中から梅雨空を眺めつつ思った。胸には赤ん坊を抱いている。傍らには夫となった村の青年が、長男と遊んでいる。

旧姓・山口美保はこの村での生活におおむね満足だった。

## 第十一回 予言と寿命

俺は未来を知ることができる。いわゆる、予知の超能力を持ったエスパーだ。

この超能力を使って俺は勝ち組な人生を送ってきた。競馬も株も、どうやれば勝てるのか、あらかじめ分かる。自分に降りかかる災難は、あらかじめ回避できる。まさしく全知全能だ。

ただしこの予知能力には、ひとつの制限があった。予知を一回行うごとに、寿命が三日減るのだ。思い出してみると俺も今まで、不用意に予知を使いすぎたかもしれない。最近になって、寿命の残りが不安になってきた。

ところが一回の予知ごとに寿命が三日減るとはいつても、そもそも俺の寿命がいつまでなのか、普通の人間には分かるわけがない。だが俺は予知能力を持っている。これからは予知も慎重に使おう。そう誓いながら、俺は自分の残り寿命を予知してみた。

なるほど、俺の寿命は残り三日か。

予知は一回ごとに寿命を三日削るから……すると……

死にました。

## 第十一回 予言と寿命（後書き）

今回は二百字以内という縛りを加えて挑戦してみました。

## 第十二回 夜中に旦那のスネ毛を剃る嫁

ジヨリ……ジヨリ……

静かな深夜の寢室に、毛を剃る音だけが微かに響く。僕は勢いよく布団を跳ね上げると同時に、部屋の灯りを点けた。

すると布団の中にいた人物は、カミソリを持ったまま、驚いた表情を凍り付かせていた。

「君だったのか、剃江」

「剛三郎さん、気付いていたのね」

夜な夜な僕のスネ毛を剃っていた謎の人物は、妻だったのだ。僕は妻を正座させると、僕も膝を付き合わせて正座し、事情を聞くことにする。

「さて、教えてくれるかな。君が僕のスネ毛を剃っていた理由を」  
妻は恥ずかしそうに顔を真っ赤にさせて、持っていた安全カミソリをそつと僕に差し出した。

「このカミソリに見覚えはありませんか？」

「こつ、これはジェニフアー！」

説明しよう。もともと僕はスネ毛の濃い方だった。どんなカミソリを使っても、あつという間に刃がダメになってしまふ。そんなある日、出会ったカミソリだけは、どんなに使っても全く切れ味が落ちない。その特別なカミソリを僕はジェニフアーと呼んで愛用していたのだ。

ところが僕はジェニフアーを唐突に失ってしまふ。その時の僕はそりゃあもう、落胆したものだ。だが同時に、後の妻となる剃江と出会ったのも、その頃だった。

「実は私……あなたが愛用していたジェニフアーに魂が宿って生まれた、スネ毛剃りの精なのです」

「なんだって!？」

妻の告白に、だが心のどこかで納得している僕がいる。ジェニフ

アーを失い、だが僕のスネ毛は一向に濃くならなかった。もしかして体質が変わったのかも思ったが、剃江がジェニファーの生まれ変わった姿だとすれば合点が行く。剃江はジェニファーとして、僕のスネ毛を剃り続けていてくれたのだ。

「ごめんなさい、黙っているのは悪いと思っていただけけど、こんな本能丸出しな姿を見せるのは恥ずかしくって」

ああ、スネ毛剃りの精だから、スネ毛を剃りたいというのは本能であつて。でも、人の姿になったからには本能を見せるのは、例えば性欲みたいなものだから、恥ずかしいのか。

「だけど君が剃ってくれているから、御覧の通りスネもピツカピカで剃り甲斐がなかったろう。どうせなら、胸毛とか鼻毛とかも剃ってくれて構わなかったのに」

「えっ……それはさすがにドン引きするわー」

さすがは自称・スネ毛剃りの精、普通の人類とはまた感覚が違うんだな。でも……

「いいえ、むしろ気持ち悪いのは私の方。人間ではない妻なんて気持ち悪いわよね。すみません、私……」

その先をいかけたところで、僕は言葉を遮り、妻をひしと抱きしめた。

「そんなの関係ない！」

「剛三郎さん!？」

「そりゃあ僕らはいいい大人だ、秘密のひとつやふたつあつて当然さ。んなの、どの夫婦にでもよくある、ちよつとしたすれ違いだよ！

ちゃんと話し合えば、互いに分かり合えるさ！ 僕らは夫婦なんだから」

すると剃江も僕を抱きしめ返してきた。

「愛してるわ、あなた！」

「僕も愛してるよ！」

この晩、僕ら夫婦は愛を確かめあつた。

そうさ。こんなの、どの夫婦にでもある、ちよつとしたすれ違ひみたいなもんだ。僕ら夫婦の場合は、たまたま嫁がスネ毛剃りの精だったというだけで。世の中にはネコミミや、ハイヒールの力カトや、メガネに性的興奮を覚える人だっているのだ。妻の正体が何だつて関係ない。分かり合えなければ、その度に話し合えば良いのだ。そして僕ら夫婦はこの後も、幾度となく衝突しては、その度ごとに仲直りした。まるで普通の夫婦のように。

十ヶ月後。

僕は産婦人科のベンチで祈っていた。僕ら夫婦に、とうとう子供が産まれるのだ。

人間とスネ毛剃りの精との間にも、子供を成すことが出来るのか。まあ、御伽噺でもそんな感じの話はよくあるし。産婦人科の方でも「あつ、精霊妖怪関係の方ですねー」とか簡単に了承されていたし。実は珍しくないのかもしれない。

考え事していると、赤ん坊の泣き声が聞こえた。遂に産まれたのだ。分娩室の扉が開かれる。助産師さんが抱っこした赤ん坊へ、僕は駆け寄った。

「おめでとうございます、元気な丸々とした、電動鼻毛剃りの女の子ですよ！」

「そう来るのかよ!?!」

どうやら僕らが親子として分かり合い、相応の時間がかかりそうだった。まるで、普通の家族のように。

## 第十二回 夜中に旦那のスネ毛を剃る嫁（後書き）

小説書き仲間の紅月赤哉さんからパスされた無茶なリクエスト、「夜中に旦那の臍毛を剃る嫁」というお題を元に小説を書いてみました。

他にも同じお題で書かれている人が大勢いますので、違いを楽しむのも面白いかもしれませんよ。



### 第十三回 牢獄と香り

昔々、インドのとある小国に、心優しく花々を愛する王子がいました。

ある日のこと、王子は花々を愛でている最中、花卉に隠れていた蜂に指先を刺されます。家臣たちは王子に無礼を働いた蜂を殺そうとしましたが、王子は逃がしてやります。

そんな王子を家臣たちは優しすぎると諫めつつも、慕っていました。

そんな小国に、隣国が攻め込んできます。

隣国の勢いは留まるところを知らず、王族たちは皆殺しになりました。王子も塔へ幽閉されます。ここでは食べ物を与えられず、餓えて死ぬまで放っておかれることになったのです。

ところが隣国は大王の急死により分裂。数年後に小国は自由を取り戻しました。

小国の戦士たちは、自らが仕えるべき王族がどこかに生き残っていないか。国中を探しますが、どこにも王族の血を受け継ぐ者はいません。

もはや王の血統は根絶やしになったのか。あきらめようとして最後に、戦士たちは王子が幽閉されていた塔に辿り着きます。

王子はもはや餓えて、生きてはいないだろう。そう思いながらも塔に入った戦士たちは驚きます。石造りの塔の中はまるで花畑のような香気に満ちていました。

実は王子が幽閉されてから、しばらくしたある日のこと。王子が身に纏った花気で、花畑があると勘違いした一匹の蜜蜂が、塔の中に迷い込んだのです。それは昔、王子が逃がしたあの蜜蜂。

これをきっかけに多くの蜜蜂が外と牢獄とを行き来することになります。そして王子は蜜蜂が運ぶハチミツを食べて、飢えを凌いでいたのです。

ですから遂に王子を見つけた戦士たちは驚きました。王子が生きていたのにも驚いたのですが。牢獄の中は溢れるハチミツで黄金色に輝き、花畑よりもむせ返るような花気で満ちていたのですから。

そうして戦士たちに助けられた王子は、戦争で荒れた国を花々で満たし、平和に治めたということです。

### 第十三回 牢獄と香り（後書き）

半自動的にストーリーが浮かぶという、とある技法の運用実験として、非小説書きの友人にプロットを作ってもらいました。

お題を見た瞬間に友人が思いついたのは仏教説話にある、幽閉されたビンビサーラ王が餓えないよう、王妃が自分の体に蜂蜜を塗って面会していたという話だそうです。

だから似てしまうのは仕方ないにしても、生じてくる差異を楽しんでいただけたらと思います。

## 第十四回 入浴時にバスタオルを用意し忘れた

「たいへん、たいへん」

カーチャンは慌てていた。その前にタカシが現れる。

「あら？ もうお風呂から出たのね、タカシ」

「どうしたんだい、カーチャン」

「ごめんね、カーチャンったらバスタオルを洗濯して取り込んだ後、風呂場へ持つて行くの忘れてたの。脱衣所にバスタオル、一枚もなかったでしょう？」

「そうだったっけ。でも問題なかったよ」

「まあタカシったら、どうやら他にタオルがあったみたいね」

「いいやカーチャン。オイラの方は、そもそも風呂から出た後に体を拭くという発想自体を忘れていたよ！」

すんごい自慢気な笑顔でサムズアップするタカシ。

髪の毛からは水滴がしたたり落ち、パジャマはぐしょ濡れ、廊下には水たまりが出来ていた。

強く握りしめた拳を、ゆっくりと振り上げるカーチャン。

「タカシイイッツ！ 歯ア食いしばりな！」

「うあああ、御免よカーチャン！？」

#### 第十四回 入浴時にバスタオルを用意し忘れた（後書き）

小説書き仲間の紅月赤哉さんによる壮絶な無茶振りお題、第二回目になります。

お題を出されたのが昨晚。翌日の仕事中にプロットを考えて。仮眠後に執筆。UPしました。……という超即興ショートショートになります。

## 第十五回 鼻毛の大きさのロボ

アルファ一星の国際会議場が暗くなったかと思うと、スクリーンに写真が投影された。集められた国家元首たちがどよめく。

「これが先日捕獲された、ベータ星の惑星探査ロボです」

「恐ろしい……なんというテクノロジーだ」

「皆様も御存知の通り。我ら以外にも高度な文明を持った人類の住む、ベータ星が発見されてからというもの。ようやく我々もベータ星へ惑星探査ロボを送り込む予定でした」

「次の資料を御覧下さい。えー、このベータ星製惑星探査ロボが捕獲された際の状況ですが。アメリカ国ヲパイヨ州の農夫サム四十三歳が畑で農作業中。呼吸に違和感を覚えたので耳鼻科へ運ばれたところ、鼻毛に絡んだ惑星探査ロボが発見されたとのことです」

「そうなのです。我らですら身長は何倍もあるスケールでないと、惑星探査ロボを開発できないというのに。ベータ星では同じ性能のロボを、鼻毛に絡んでしまうまでの小型化に成功させてしまっているのです」

「すさまじく精巧だな」

「この有様では、一体どれほどの数のロボがアルファ一星に送り込まれているか。分かったものではないぞ」

「ああ、これはベータ星への侵略どころか、交流も止めておいた方が良くもしれん」

ベータ星の国際会議場が暗くなったかと思うと、スクリーンに写真が投影された。集められた国家元首たちがどよめく。

「皆様も御存知の通り、これぞ我らがアルファ一星に送り込んだ惑星探査ロボです」

「にわかには信じがたいな」

「君、ロボが捕獲された際の状況を説明してくれたまえ」

「えー、このベータ星製惑星探査ロボが捕獲された際の状況ですが、アルファー星のどうやら農夫が呼吸をした際に……鼻毛に絡んでしまったとのことですよ」

「信じられん！」

「皆様も御存知の通り。この惑星探査ロボは、我々の身長は何倍もある、巨大なものです。それが彼らの鼻毛に絡んでしまうということとは……」

「ベータ星の人類は、とてつもなく巨大だということか」

「この有様では、ベータ星と関わり合いになったら、一体どれだけの破壊が行われるのか。分かったものではないな」

「ああ、これはベータ星への侵略どころか、交流も止めておいた方が良くもしれん」

かくしてアルファー星とベータ星はその文明が滅ぶまで、交流を持つことなく、平和に過ごしましたとき。

## 第十五回 鼻毛の大きさのロボ（後書き）

小説書き仲間の紅月赤哉さんによる悶死確実な無茶振りお題、第三回目になります。

お題を出されたのが昨晚。翌日の仕事中にプロットを考えて。仮眠後に執筆。完成して一作はUPし終わってから、更に当作品をイチから執筆して、またUPした。……という超々即興ショートショートになります。

正味、もうしんどい。



## 第十六回 カエルと家族

川津長礼「かわつ・ながみち」は実家に帰省していた。初孫の顔を母へ見せるためだ。

妻は長旅の疲れで、先に別室で寝てしまっている。居間には長礼と母と、ベビーベッドの中で、やはり眠っている我が子の三人。そこで、座卓を拭いていた母が、眠る孫を起こさないよう、そつと話し出した。

「アンタもこれで一児の父親か、頑張らないとね」

「あ、ああ……」

長礼は生返事を返すと、仏壇に線香を上げ、そつと父の位牌に手を合わせた。母はそれが自分から目を逸らされたように感じたらしい。

「なんだい、シャツキリしないねえ」

「どうもさ、不安なんだよ」

ふたりの話し声も気にせず、我が子はすやすやと眠っている。長礼は座卓上にあつた湯飲みを取ると、残りの茶を飲み干した。

「自分が父親になった、つて自覚がまるで起こらないんだ。まるでカエルがオタマジャクシを見ている気分だよ。皆は親子で似てる似てるって、いうけれど。赤の他人にしか思えないっていうか」

一氣にまくし立てて、長礼はうなだれた。そんな息子を見て、「父親になつたつていうのに、情けのない子だねえ。ちよいとお待ち」

母はすつくと立ち上がり、他の部屋へ向かった。ゴソゴソと何かを探す音がする。そうして戻ってきた時、母は古いアルバムを手にしていた。

「ほら、御覧よ」

母はアルバムを座卓の上に広げた。アルバムに挟んであつたのは、長礼が幼い頃の写真だった。何ページがめくっていると、とある写

真を見て長礼は思わず笑いそうになってしまったのを、慌てて止める。

そこには自分が生まれたての、赤ん坊の頃の写真があった。赤ん坊の頃の自分は、ベビーベッドの中にいる我が子と瓜二つ。そっくり似ていた。まるで似たもの親子のように。

「まったく。アンタだって赤ん坊の頃があっただよ。カエルが昔の自分はオタマジャクシだったのを忘れて、どうするんだい」

そういつて母カエルは、息子オタマジャクシをケロケロと笑ったのだった。

## 第十七回 偽名と錨と裁判

「お静かに！ では被告は報告に間違いありませんね」  
裁判官が判決木槌をカンカンと鳴らした。

「この国では偽名を使うと、重罪になります。それを理解しながら、なぜ被告人は断固として戸籍にない名前を使っていたのですか？」  
被告人席で中年男がうなだれる。

「実は……わたしには過去の記憶がありません」

「記憶喪失、というものですか」

「はい、わたしは自分の名前も忘れてしまったのです。だから何でも良い。抛り所となるものが欲しかった。たとえニセモノであつても名前が欲しかったのです」

裁判官は少し考えて。

「分かりました。では被告人に判決を下します！」

男はびくりと肩を振るわせた。

「これから被告人は、グラブネルス・アンカーマンと名乗ってください。それがあなたに与えられた償いです」

驚いた男に裁判官は加えて告げる。

「錨、という意味ですよ。あなたもこの名で、自らが留まれる抛り所を見つけてください」

今やアンカーマンという名になった男は感謝して、何度も何度も裁判官へ頭を下げた。裁判官は自慢のヒゲをなでつけて、満足げだ。「ふむ、やはり、この辺りが判決の落としどころですかね。錨だけに」

## 第十七回 偽名と錨と裁判（後書き）

試しに三題噺も書いてみるんだぜ。

ちなみに現在メジャーなのは、ストックレス・アンカーという可動式の錨だったはず。

## 第十八回 猫と爆弾と廃墟

事件は私が「国境のなさげな医師団」の一員として、紛争の絶えないアフガニスタン国へ入った時に起こった。

ある日、大きな抗争で入院患者が多く運ばれ、病院には収容できなくなったのだ。我々は人のいなくなったビルを少しの間、無断で仮住まいさせてもらうことにした。そうと決まれば早速、私を含めた何人かで中の様子を探ることとなる。

ところが一室にテロリストのトラップが仕掛けてあったのだ。見えないよう張ってあったワイヤーを、私はつま先で引つ張ってしまふ。途端、導火線が点火、黒くて丸い爆弾へと種火が走った。

にしても黒くて丸い、導火線のついた爆弾って、また古風な。カートウーンでもそんな爆弾は見ないぞ。心のどこかで考えつつも、私は叫んだ。

「しまった、爆発するぞ、逃げる！」

私はもう間に合わない。死を覚悟する。ところが導火線の火が爆弾に辿り着くと……

ぼんっ！

「にやにやにやにやーん」

破裂音と共に中からくす玉のように、何十匹もの子猫たちが飛び出してきた。なんだこの爆弾。

かくして一命を取り留めた私だったが。許せないのは、こんな小さい爆弾状の球体にたくさんの子猫をつめこんだ、テロリストだ。何のイタズラか知らないが、子猫たちも可哀想に。

私は動物愛護の精神により、その中の一匹を引き取り育てることにした。もちろん本国でも私たちは一緒だ。ママも歓迎してくれる。やがて彼女は血統書付きの紳士とお見合いし、お腹が大きくなってくる。そう、彼女はメス猫だったのだ。

にしても疑問が残る。どうやれば、あんな小さな球体に多くの猫

を、しかも元気に生きてたまま押し込めたのだろうか。あんな狭い場所  
所に長期間詰め込まれば、子猫でなくとも衰弱し死んでしまうだ  
ろうに。そもそも製法もだが、ならば工場もあるのだろうか。

そんな疑問とは関係なく、彼女に出産の瞬間がやってきた。とこ  
ろがテーブルの上に産み落とされたのは、子猫ではなく……ゴトン  
ッ！ と重い音が響く。導火線のついた、黒くて丸い爆弾だった。  
なるほど、この猫はそもそも爆弾から産まれる種族だったのか。  
ひとりでに導火線が点火する。

「しまった、爆発するぞ、逃げる！」

それからは黙示録のような光景が繰り広げられた。

大量発生した子猫を処分するため、遂にNAVYが派遣されるも、  
つばらなおめめに、ふわふわ毛並み、その上に肉球でぶにぶにされ  
ては敵わない。プレジデントは軍の撤退を決定。町の閉鎖を命じる。  
我が故郷は猫に人が追いやられて、ゴーストタウンと化したのだ。

この手記は疎開先で書いている。全ては戦争という狂気が生んだ  
悲劇なのだろう。我々は忘れてはならない。だから、今度の子猫こ  
そ上手に育てるよ！？

こっそり一匹だけ隠してつれてきた子猫へ頬ずりする。ああつ、  
それにしてもニャンニャンは可愛いなあああ。おや、何やらお腹か  
らチツクタツクという時計のような音が……

「しまった！ 時限式か！？」

## 第十八回 猫と爆弾と廃墟（後書き）

小説書き仲間のちゅーん君が「猫・爆弾・廃墟」という三題噺をやっているのを見て、ボクも試しにやってみました。

ところが「猫と爆弾」で浮かぶイメージが「くす玉のように数十匹の猫がにゃーんと飛び出す爆弾」というものしかなく、あきらめかけていたものの。じゃあ「くす玉（略）」を元ネタに作品化すれば良いじゃない！ と発想転換し、今に至ります。

やりゃあ書けるもんだ。

## 第十九回 称号と老い

王都からは遠く離れた、とある辺境の領国にホラ吹きの大騎士様  
がいました。

大騎士様はワシも昔は無茶したもんじゃ、と。かつて自分が潜り  
抜けてきた冒険譚をするのが大好き。いわく、戦で一騎駆けし大将  
首を獲った。いわく、悪漢にさらわれた姫君を救った。いわく、火  
を吹く悪竜を退治した。いわく、この胸に輝くのがその武勲で貰っ  
た勲章なんじゃ。

毎年の収穫祭が来ると領民に酒と馳走を振る舞いながら、大騎士  
様は語り上げるのが好きでした。

ところが、領民はいちいち関心しながら大騎士様の話を聞くのだ  
けれど、実のところ全て嘘だと知っていました。

ですが大騎士様は、法を守り、民の声をよく聞き、無理な重税を  
かけることもなく、祭りともなれば気前よく振る舞う。民にとって  
大騎士様は素晴らしい領主でした。ただちよつと、ホラ吹きという  
困った癖があるだけで。

だから民は嘘を指摘せず。大騎士様の語る武勇伝を、笑顔で聞い  
てあげるのです。

そんな大騎士様にも悩みがありました。

大騎士様が持っている勲章は全て、都の職人に作らせた偽物です。  
もちろん、人に自慢できるような物語も本当は持っていない。

自分もそろそろ老いてきた。だが世は平和で、武勲を立てられる  
ような戦いのある気配は一向にない。もしかして、自分はこのまま騎  
士として無名のまま朽ちて死んでゆくのか。

せめて、せめて名が欲しい。永く語り継がれるような名が欲しい。  
大騎士様の焦りは募るばかりです。



そんなある日、大騎士様は盗賊団が領地を襲おうとしているとの報せを受けました。もう戦争がなくなつて久しく、食い扶持を失つた傭兵崩れが盗賊となつて、近隣の村々を襲つていたのです。大騎士様は民を心配させぬよう黙つて、たつたひとりで盗賊団と戦うことにしました。

実のところ、大騎士様は知っていたのです。自分がホラ吹きだということ、民は知っていたと。知つてなお民は、自分のために黙つて嘘を聞いてくれていたのだと。

だから大騎士様は今や、語り継がれるべき名など不要。ただ民草を守りたい一心でした。その姿まるで吟遊詩人の謳う物語にある、救国の英雄のように。

翌朝。異常を感じて起き出した村人たちは見ます。

甲冑は剥がれ、盾は砕け、剣は折れ、何本もの矢を受けて、全身に刀傷を負つて、死んでもなお朝日の中に立つ、赤く染まつた大騎士の姿を。

盗賊たちは大騎士の奮闘を前にして、既に逃げた後でした。

それから数年ののち。とある老騎士の物語が、王国中で吟遊詩人たちに語られることとなります。身命をかけて民と国を守り、朝日の中に死んだ。その名も黎明の大騎士。

それはホラ吹きの大騎士様が初めて得た、正真正銘、真実の称号でした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3312y/>

---

作者がテーマを選べないショートショート集

2012年1月15日00時47分発行